



◀◀よさのみらい会議で使用した「よさのまちづくりデータブック」を町ホームページで公開中！



くらしづくり分科会の様子

全 体では、ナビゲーター講演として、デジタル庁参与の伊藤伸さんから「デジタル×地方創生」と題し、講演をいただきました。

「デジタル化は目的ではなく課題解決の手段」と話し、全国各地の実例を紹介。「小さなまちほど住民の声を聞きやすいという強みとデジタルを活用することで、住民満足度を高めることができるのではないか」と話されました。

10月13日開催

第2回よさのみらい会議 10年後のまちの しごとづくり くらしづくり ひとづくり

3つの分科会での 主な意見

「仕事がない」イメージを変える

まちに「仕事がない」と思われている背景や課題について話し合いました。

- 町内事業所の情報発信が不足し、若者に仕事の選択肢が見えにくい。
- 「下請け構造により利益率が低くなりやすい」「まちのオンラインワン技術がいかされていない」「PRや優遇措置の不足」などの課題がある。
- 地場産業の衰退は後継者不足と時代の変化への対応の遅れもある。

くらしづくり

暮らしの便利さと安心を両立

空き家や交通、行政サービスなど、日常にかかわる課題について話し合いました。

- 空き家や遊休地などを地域と行政が連携して、管理・活用する仕組みづくりが必要。
- 自動運転技術を活用した、新たな交通手段を導入してほしい。

ひとづくり

住民同士のつながりが 実感できるまちへ

交流の場づくりに関する課題について話し合いました。

- 公民館などの利用申請手続きが心理的・制度的なハードルにもなっており、より開かれた多世代交流拠点としての活用が望ましい。
- 地域内回覧板などの情報伝達手段に加え、デジタル技術の活用が不可欠。デジタルに不慣れな方々が使い方を学べる場所や機会の提供が必要。
- 障がいのある方の気持ちや立場を理解・体験し、物理的な環境整備だけでなく「心のバリアフリー」が重要。



ひとづくり分科会の様子



中高生よさのみらい会議に参加した皆さん

10月12日開催

中高生よさのみらい会議 みんなで話し合う 「10年後のまちの ありたい姿」

町 内の中学生と高校生19人が集まり、自分の将来の夢と重ね合わせながら、どんなまちなら住み続けたいか、戻ってきたいと思うかを話し合いました。



上／「よさのまちづくりデータブック」を見る参加者
左／付せんに意見を書き込む参加者

中高生の意見

便利なくらし

- 映画館やショッピングモールなど、友人と過ごせる娯楽施設があるとうれしい。
- レンタカーやレンタサイクルなど、交通手段を増やして便利にする。
- リモート授業との併用で誰もが学びやすくなると思う。

居場所づくり

- 気軽に交流したり自由に勉強したりできる場所がほしい。
- 住民や他校の生徒、観光客、外国人、都市部の人も交流できる機会を増やす。
- 公民館や図書館が中高生にも使いやすくなるとうれしい。

まちの魅力・ついで

- 地域の祭りや行事を守り続け、伝統を大切にしたい。
- 丹後ちりめんなど、まちの特産や魅力を発信したい。
- 家から働ける仕事場があること。

こどもたちの地域感

- 町外で「どこ出身？」と聞かれると、「天橋立の近く」や「与謝野町」「丹後」と答える。
- 旧町の区分をあまり意識していない。

2日間の会議を 振り返って

10月12日、13日の会議を振り返り、共通する意見や中高生ならではの意見について共有が行われました。

よさのみらい会議コーディネーターの伊藤伸さん（一般社団法人構想日本 統括ディレクター）は、共通の意見として「第3の場所がほしい」という声が多く寄せられたことを挙げ、「家や学校以外の居場所をどのようにつくるかという視点は、世代を越えて共通していた」と振り返りました。

一方で、中高生ならではの意見として、行政や地域の枠組みにとられない自由な発想や提案があったことを紹介。また、「合併から20年が経過し、若い世代の中には『与謝野町』を一つの地域として自然に受け止める意識が根づいている」と述べ、「梓にとらわれず、未来に向かって『一つの与謝野町』をどうつくっていくかは、10年後を見据えたまちづくりを考えるうえで大切な視点である」とまとめました。